

# 一 般 演 題 抄 録

## 1. 華岡青洲自筆「萬病一毒之説」：現代語訳および注解

高橋 均 丸山次郎 福西健至 北岸英樹 植嶋利文  
松島和秀 大澤英寿 金井 透 坂田育弘  
近畿大学医学部附属病院救命救急センター

現在まで、華岡青洲自筆の医学書とされてきた書物は、天理図書館所蔵の「乳巖治験録」のみである。本会で取り上げる「萬病一毒之説」という書物は、札幌華岡本家所蔵の春林軒家塾本の中から、故宗田一氏が新発見されたもので、天理図書館所蔵本以外では初の華岡青洲自筆本である。その内容は解説されないまま経過してきている。本発表ではその文意を解説し、現代語訳とし、解説を加える。

華岡青洲は、吉益東洞の子息、吉益南涯の弟子にあたる。「萬病一毒之説」は、華岡青洲自筆本であり、門人が吉益東洞の提唱した「萬病一毒論」の解説を

求めてきたため、自分自身で古典文学の文章を引用し解説したものである。本書物を解説することにより、華岡青洲が儒学に深く通じていたことがわかる。本文中でも、「説文」、「大學」、「史記」禮書、「漢書」霍光傳の文章を引用して解説している。そのみならず、梵書「大乘記信論」さえも引用し解説している。

これらのことから、華岡青洲は、江戸時代後期の医学者として、極めて教養人であり、医学のみならず、儒学や仏典にまで通じており、その知識の深さに感心させられる。

## 2. 磁気刺激電流方向の差による磁気誘発筋電図の差異

千葉 惇 仲西宏元 稲瀬正彦 秩父志行\*  
近畿大学医学部第1生理学教室 \*近畿大学ライフサイエンス研究所

パルス磁気刺激は、電磁誘導により生体内に渦電流を誘発させ、神経や筋が興奮する。我々は渦電流の方向を定めることのできる8字コイルを用い、ラット頭部上と脊髄上とを刺激させ磁気誘発筋電図に表われる特徴を調べた。

10週齢と15週齢オスのSDラット各5匹を用いた。木製の固定台上にラットを置き、頭部上及び脊髄上2-3mmにコイルを配置した。磁気刺激は、直径70mmの8字コイルを用い、マグステムM200 (Magstim社) で電力を供給した。出力は、最大値(2.2テスラ)の10%から80%までを2%ごとに区切り、定量化した。8字コイルは、その8字交差部直下でコイルに流れる電流とは逆向きの渦電流が生じ、それが生体への刺激となる。渦電流の方向は頭部から尾部への正中線方向を0°とし、左右それぞれ45°, 90°, 135°, そして逆向きを180°とした。磁気誘発筋電図は、右前脛骨筋より導出した。

頭部上の刺激では、渦電流方向が0°の時に閾値が

最大の運動誘発電位(MEP)を生じ、左右へ45°から90°へと方向を変えると閾値は低下した。MEPの潜時4.6msecには渦電流の方向の違いによる変化はなかった。また、15週齢では、長潜時(12msec)のMEPも誘発し、渦電流の方向を左右90°に設置した時に生じやすかった。

脊髄上の刺激では、短潜時(1.9msec, M波)と長潜時(5.3msec, H波)が誘発され、右90°の時にH/M比が最小を示した。左右45°~135°におけるH, M波の発達曲線では、刺激強度が増加するのにもないH波の振幅の増大に一過性の低下が生じた。

8字コイルを用いた頭部上や脊髄上での磁気刺激では、渦電流の流れる方向により神経の興奮性に差がみられた。これは、渦電流の方向により神経組織内の神経回路網の興奮性の選択に影響を及ぼしたためと考えられる。